

イギリスの視覚障害をもつ学生たち - The West of England College におけるインタビュー -

筑波技術短期大学附属診療所

山下 仁

要旨：視覚障害者の教育機関である The West of England College (WEC) の学生5名にインタビューを行った。学生生活の満足度は基本的に高いようであったが、コンピュータのハードウェアとソフトウェアの更新の遅れには不満を訴えていた。WECを選択した主な理由は、多くのスタッフから多様なサポートを受けられるからであった。筆者にとって印象的であったのは、彼らの職業選択の幅広さと、WECにおける物的資源に劣らぬ人的資源の充実であった。

キーワード：イギリス、視覚障害、学生、インタビュー、短期大学

1. はじめに

前報で、イングランド南西部の視覚障害者継続教育機関である The West of England College (以下WECと略す)を紹介した[1]。この情報は、WECの事務管理担当者との対話、パンフレット、および施設見学にもとづくものであった。これにより施設環境および教育システムについてはその概要を把握することができた。しかし学生と接触して意見を聞く機会はこの時には得られなかった。そこで、実際に生活している学生達自身の生の声を聞くことができれば、WECの内部からの評価が把握できるとともに、イギリスで視覚障害をもちながら自立を目指す若い世代の考え方を理解できるのではないかと考えた。

今回、WECの学生達と直接話をする機会が得られたので、そのインタビュー内容を報告する。

2. 方法

WECの指導教員(tutor)[1]の一人に数名の学生を選択してもらい、その中から同意を得られた学生に参加して頂いた。学生の選択にあたっては、男女ほぼ同数とすること、進学希望者と就職希望者の両方に参加してもらうこと、全盲と弱視の両方の学生を含めること、を希望した。2000年7月4日の夕方、WEC施設内の一室で全員が対面し、自己紹介や日常的な会話に質問を織り交ぜながら進行了。あらかじめ質問項目を用意していたが、会話の進行にしたがって変更も加えた。インタビューは1時間の予

定としていたが、実際に終了してみると約2時間が経過していた。

参加した学生には、インタビューの内容をまとめてテクノレポート誌で紹介することを説明し、同意を得た。眼疾の記載についても、全員が快く承諾してくれた。

3. インタビューに参加してくれたWECの学生達

5名の学生(写真)が出席してくれた。以下に彼らのプロフィールを紹介する。



写真 WECの学生たち

前列左よりシェリー、ジェイミー、キャサリン、後列左よりリラム、グレン。

キャサリン：17歳女性。サマーセット州(WECの所在するデボン州の隣)出身。エクセター生活歴2年。眼振、視野狭窄、先天性白内障。拡大文字使用。公共役務

(public serviceの訳で、救急、消防、保安、救助などに携わる)コースを専攻し、この関連の仕事に就くことを希望している。このためにはInformation Technology (IT) やコミュニケーションの技術が必要であり、GCSE (General Certificate of Secondary Education, 前報[1]を参照のこと)において5つの科目で一定の成績をとる必要があるという。スポーツの授業は嫌いだ、公共役務には欠かせない科目なので選択している。趣味は水泳で、水泳クラブに所属。日本についての印象は産業とテクノロジーだという。

グレン：16歳男性。デボン州出身。エクセター生活歴11年。無虹彩，眼振。拡大文字使用。大学進学コースを選択しているため，週5日すべてをExeter Collegeで学んでいる。好きな科目は数学，嫌いな科目は芸術と歴史。大学（university）を卒業して会計士の資格を取って働きたいという。趣味はコンピュータと音楽（クイーンのファン）で，水泳クラブに所属。日本の印象はテクノロジー。幼少時に視覚障害のために「いじめ」に遭い，両親がThe West of England School（WECの母体，前報[1]参照）に転校させることを決めた。

シェリー：18歳女性。チャネル諸島出身。エクセター生活歴7年。レーベル先天黒内障，視野狭窄。普通文字使用。ビジネス（主としてIT）コースを専攻している。来年は別のコースで秘書の技術を身につけたいと思っている。卒業後の進路はまだ決めていない。好きな科目は保健，嫌いなのは財務。趣味はキーボード，歌，音楽（カルチャークラブのファン）で，スポーツクラブに所属。日本について知っていることは，ソニーのウォークマンとプレイステーション。

リアム：19歳男性。サマーセット州出身。エクセター生活歴3年。白内障，水晶体切除，4年前から全盲。現在点字を習得中。家具製造コースを専攻しており，将来は自営で家具作りをしたい。好きな科目はMachining（大型の工作機械で木を切ったりする作業），嫌いなのは手を使う鋸引き作業などの実習。趣味はウェイトリフティング，ランニング，オーディオテープによる読書。クラブには所属していない。日本について知っていることは武道。失明しなければ軍隊に入りたいかった。

ジェイミー：19歳女性。デボン州出身。エクセター生活歴7年。先天性視神経萎縮。普通文字使用。簿記など2つのコースを修了してWECを卒業したばかりであり，現在は就職先を探している。出来れば簿記の資格を取得して働きたいという。好きな授業科目は数学，嫌いなのは書類整理。趣味は，読書，リアムに本を読んであげること，犬の散歩（週末の帰省時），音楽，映画。クラブ活動は行っていない。日本について知っていること

は盆栽。リアムと仲が良い。視覚障害のために「いじめ」られた経験がある。

4．共通の返答および意見

5名の学生達に個別に質問したつもりであったが，同様の答えが返ってくる場合も多かったので，それらについてはここに記すことにする。

なぜWECを選んだのか，という質問について。WECに入学する前の年齢からThe West of England Schoolに在学していて，そのままWECに進学した学生が多いが，基本的には多くのスタッフから多様なサポートが受けられるからというのがWEC選択の理由であった。

みんなWECでの生活は楽しいし，基本的に満足していると答えた。ただ，コンピュータ関連のソフトウェアおよびハードウェアが古くなっているの，早くアップデートしてほしいということであった。今でもWindows 3.1を使っているそうである。もうひとつは，門限など学内のルールが多いのが多少不満なようであった。

生活面では，共に生活しているキャンパス内の仲間達が詮索好きで，お互いがいろいろと知りすぎており，プライバシーが保ちにくいのがいやだという。5人とも学外に親しい友人がおり，しばしば遊びに出かけるという。

社会については，視覚障害者が平等に扱われていないと感じる場面が多いという。公共施設や交通機関の利用にあたっては有利な点があり，職が見つからない間は失業手当が支給される。このような点を考えると，イギリスに生まれ育ったことはラッキーだと思うが，視覚障害者に対してなされるべきことはもっとたくさんあると思う，と話していた。特に，仕事の機会を均等に与えることを強く希望すると，5人が口をそろえて語った。また，歩道が工事中なのに，サインが出てなかったり分からなかったりして，ぶつかったり転んだりするのはショックであるし，街や店の構造が視覚障害者だけでなく，あらゆる障害者に対する配慮が欠けているとのことであった。全盲のBlunkett教育雇用大臣について感想を尋ねてみたら，5人のうち4人は名前を知っていたが，それ以外はよく知らないとのことだった。1人は「それ誰？」と言って他の学生達を笑わせていた。

筑波技術短期大学のパンフレットを手渡し，視覚部においては3つの学科があること，鍼師の23%，あんまマッサージ指圧師の29%が視覚障害者であること[2]を説明した。この情報に対し彼らは，イギリスで視覚障害者に最も人気のある職業はcomputingおよびhealth and social care（心身に障害のある老人や子供の施設におけるケア）であるが，それ以外にも様々な選択肢があり，

やりたいことがあれば自分達はそれをやる、と語った。また、筑波技術短期大学視覚部の学生に質問したいことは、「どのような補助（help）を受けているのか」ということであった。

5. 考察

今回のインタビューに出席してくれた学生を選択したのは、WECの指導教員の一人であった。様々な学生の意見を聞き取ったので、前述したように学生の選択にあたって幾つかの条件を希望したが、選択された学生5名がすべての学生の考え方を代表するわけではないであろう。おそらく比較的従順でコミュニケーションが容易な学生が選ばれたのではないかと推察している。しかしそれでも、5名の学生すべてが口をそろえて語った点については、イギリスの視覚障害をもつ学生の一般的な意見ではないかと筆者は考えている。

イギリスの街の中心地では、杖をついた高齢者や車椅子の人達を日本よりずっと多く見かける。しかし学生達の話から察すると、イギリスの街や店のほうが日本よりも障害者に配慮した構造をしているわけではないようである。市街で高齢者や障害者をしばしば見かけるのは、むしろ国民性や習慣の違いにもとづくものであろう。既に彼らの意見を紹介したように、実際に障害を持つ彼らにとっては、イギリスの街が決して十分にバリアフリーではないことがわかる。

5名の学生のうち2名が、視覚障害をもつが故に「いじめ」に遭った経験があった。また共同生活をしている学生同士のコミュニティが比較的狭く、プライバシーの侵害があることが示唆された。これらの問題は、日本の場合と類似しているのではないと思われる。洋の東西を問わず、障害者の抱える問題には共通した点が多いのであろう。一方、日本の視覚障害者の多くが鍼やマッサージの仕事に就くことに対しては、「日本では視覚障害者の職業の選択肢が狭い」という風に彼らの目には映ったようである。これについては当たっている部分もあるかもしれないし、筆者の説明不足にも一因があるかもしれない。彼らが強調した「晴眼者と同等な職業選択の自由」の主張が印象的であった。

筑波技術短期大学視覚部の学生が「どのような援助（help）を受けているのか」という彼らからの質問は、「どのような施設設備が提供されるのか」ではなく「どのようなマンパワーが投入されるのか」というニュアンスであった。この質問は、既に述べたように彼らが「多くの人達によって充実した援助が受けられるから」WECを選んだことと大きく関係があると思われる。コンピュータが十分にアップデートされていないにもか

わらず基本的に彼らがWECに満足できるのも、生活と学習を援助するマンパワーが充実している故であろう。このことは日本の障害者教育に重要な示唆を与えている。すなわちハード面での環境を整えても、結局はその環境と学生とを橋渡しするマンパワーがなければ、学生の満足は得られないのではないかとということである。

6. おわりに

インタビューを終えて解散した後で、学生達が食堂に案内してくれ、ティーを入れてくれた。初対面だったことを差し引いて判断しても、筆者に対する彼らの態度は極めて礼儀正しく、配慮が感じられた。このマナーが、WECの学生生活で養われたものなのか、それとも以前から両親によってつけられたものなのかは分からない。いずれにしても社会に飛び立つことに不安を感じさせない「大人」の節度、積極性、および自立性を彼らは既に備えていた。

Acknowledgments (謝辞)

I wish to thank the following students who volunteered to be interviewed; Shelly Le Flocq, Liam Harkness, Glen Turner, Katherine Vickery and Jamie Walland. Also I would like to thank Ms. Peggy Crome who arranged the interview. 本稿を御校閲頂いた鍼灸学科の形井秀一教授に感謝いたします。

参考文献

- 1) 山下 仁, 津嘉山洋: イギリスの視覚障害者のための短期大学 - West of England Collegeの場合 -, 筑波技術短期大学テクノレポート, 7, 181-186, 2000.
- 2) 平成10年度衛生行政業務報告(ニュース欄より), 医道の日本, 669号, 251-252, 2000.

Interview with Visually Impaired Students at The West of England College in UK

Hitoshi YAMASHITA

Tsukuba College of Technology Clinic

Abstract: The author interviewed five students of The West of England College (WEC). The students seemed to be basically satisfied with their college lives, with the exception of delayed hardware and software updating of their computers. The main reason why they had chosen WEC was because they could receive the support and guidance of many staff members. What impressed the author was the variety of occupational options available to the graduates. Further, the human resources as well as the well-equipped facilities makes this institution noteworthy.

Key Words: The United Kingdom, The visually impaired, Student, Interview, College